未練

紫苑

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
未練

【Ｎコード】
Ｎ５００５Ｂ

【作者名】
紫苑

【あらすじ】
ある日自殺した高３男子。しかし元の世界に戻り、自分が死ぬとはどういうことか考えさせられることに……。

第一話　始まりは死

もう嫌だ。こんな生活なんかもう嫌だ。捨ててやる。何もかもなくしてやる。

俺、松野高志は数日前から自殺することを決意していた。
理由――そう聞かれても困る部分がある。正直理由などないのだ。
高校3年であるため、毎日毎日机に向かってひたすら受験勉強。受かるかどうかも分からない不安や、周りと比べても全然伸びてかない成績に対する不安。何で俺だけ？　何でこんな苦しいことしなくちゃいけないんだ？　そう考えると生きて行くことすら馬鹿らしくなってきたのだ。

それならいっそ、死んでみるのはどうだろうか？

いつからかそんなことを思うようになり、そしてその思いは徐々に強まって来ていた。
俺が死んでも別に何も変わらないだろ。むしろ受験生が1人減ったんだ。喜ばれるんじゃねえの。そんな安易な考えが高志の中に生まれて来たのだ。

そして気づくと自殺の為の場所を探すようになっていた。いろいろ考えたが、自分のような奴に出来る方法と言えば投身しか思いつかなかった。

そして今、高志は苦労して探し出したビルの屋上にいる。人通りが少ない通りにある上に、屋上への扉には鍵をかけておいたので、誰

も入ってくることはないだろう。自殺だと分かるよう、鞄などはきっちりまとめておいておいた。本当は遺書など書けばいいのだが、そこまでする気はなかった。

さて、そろそろ逝くか。

今まで心地良い風に吹かれながら、周りの景色を見渡していた。そうすれば、少しは未練が残ると思ったからだ。しかし冷え切った自分は何も感じず、本当に自殺する気なんだと自分で自分の気持ちに確信を持つと、高志はフェンスをよじ登った。さすがにフェンス越しに下を見たときより何十倍も高く感じ――実際7階建てなので普通に考えても充分高いのだが。一瞬足がすくんだ。

しかし下を見ると幅5メートル程しかない道路はやけに広く見えまるで手招きしているかのように見えた。

「じゃあな」

高志は殆ど聞こえない声でそう呟くと、今までフェンスを掴んでいた手を放した。

第二話　鎮魂師

飛び降りた直後、一瞬の衝撃の後、目の前が真っ暗になった。

ああ、死んだんだな。

高志は自分でも自分がかなり呑気なことを考えていることは分かっていた。が、ふいに自分の様子がおかしいことに気づいた。手や足の感覚があるのだ。

何だよこれ、俺死んだんだろ。何で感覚あるんだよ。つか、何で意識あるんだ。

高志はそう思いながら、恐る恐る目を開けた。が、目を開けた瞬間、かなり強力な懐中電灯を至近距離で当てられたかのような眩しさが、高志の目を襲った。

慌てて目を閉じようとするものの、体は動かない。先程まで力を入れれば動きそうだった手足も、まるで感覚がなくなっていた。

何だよこれ。

先程と同じ言葉が頭に浮かんだ。ただ先程より恐怖という感情が増していたのは確かだったが。

ふいに光が当たらなくなった。が、高志はしばらく目を開ける気にはならなかった。恐怖で開けられなかった。と言ったほうが正しいかもしれないが――。

「お帰りなさいませ」

「え？」

突然真上から声がした。高志は思わず裏返った声を上げたが、まず声を上げられることに驚いた。
恐怖など構わず目を開けると、自分の目の前に1人の人間がいるのが分かった。恐らくこの人が先程声をかけてきたのだろう。
「あんたは……石山？」
だんだん目が慣れて来て、周りの様子が見えてきたのと同時に目の前にいる人物の正体が分かった。
石山玄――高志の同級生だが高志は、というよりクラスの殆どがあまり話したことないはずだった。話せば普通だった気がするが、常に近寄りがたい大人びたオーラを放っているため、極力関わりたくなかった。
そんな石山が何故目の前にいる？　第一俺は死んだんだよ。
すっかり混乱してる高志を見た石山は軽く溜め息をつくと、口を開いた。
「始めに言っとくけど、松野。お前は死んだんだからな。今はお前が死んでから、一週間経ってる。現場検証も葬儀も全部終わってる」
先ほどの馬鹿丁寧な挨拶は同一人物から発せられた言葉なのだろうか。と思うほど淡々とした口調だった。が、高志は何も言えなかった。何と言っていいか分からなかった。やっぱ死んだんだよな、俺。
「まあ、分からんよな。とりあえず黙って聞いてろ。お前は自殺で死んだ。だからこの世に未練が残ってんだよ――」
「何だよそれ。俺未練なんかねえよ。何もねえから死んだんだぞ」
だんだん思考回路が回復してきたためか、高志は石山の説明に口を挟んだ。
「黙って聞けって言わなかったか？　仮に未練がなかったとしてもな。お前はこうして戻って来た――霊としてだけどな。俺はお前と話せるけど、普通の連中にはお前の姿すら見えないんだ。とにかく、俺らはお前みたいに成仏しきれなくて戻って来た霊を悪霊と呼んでる。ま、よくテレビでやってるやつだよ、心霊なんちゃらとか。こ

の世にいる霊は全部悪霊ってことになるのかな」
石山はそこで言葉を切った。だが高志は何だか頭が痛くなって来た。
悪霊？　なんじゃそりゃ。死んだんだからほっといてくんねえかな。
何となく怒りのような感情が生まれて来たが、それを口に出すことはしなかった。と、石山はまた口を開いた。
「でな。俺はお前みたいな悪霊をちゃんと成仏させてやる役割持ってんだよ。てなわけで、お前が成仏するまで世話してやるから」
「は？」
「は？　じゃなくて。聞いてただろ、悪霊ってのは危険なんだよ。ほっとけば人に害が出るもんなの」
先程まで淡々と話していた石山だったが、さすがにイラっと来たのが高志にも伝わって来た。
「俺さ、はっきり言って成仏とか分からんよ。頼むからほっといてくんね？」
なーにが成仏だ。馬鹿らし。そう思いながら高志は言った。
だがそれを聞いた石山は明らかに怒りを露わにしていた。
「お前な。ふざけてるん？　１人で生きてたとか思ってるのか？お前が勝手に死んで誰も泣かなかったとか思ってるのか？」
さすがに怒鳴りちらすまではいかなかったが、突きつけられた言葉は重々しかった。
「もう生きてくの嫌になったんだよ。どうしていいか分かんなくなったんだ。そんな状態で生きてて何の意味があったって言うんだ？」
高志は半泣きだった。本当にほっといて欲しかった。戻って来たくなんかなかった。
「お前の人生、意味とかそういうのだったのか……。まあ、いい。２・３日だけこっちで本当に死んで良かったか考えてみろよ。約束する、３日後には俺がお前を成仏させてやるよ」
「そんなこと出来るのか？」
何もかもなくすことが出来るなら何でもする。高志は本気でそう思っていた。

「俺みたいなの、鎮魂師って言うんだけど、弱い悪霊なら成仏させられるからよ。約束する」
多分こいつの約束は本当だろう。たった3日だ。その間だけ石山の言う通りにしてみよう。
高志はそう思っていた。

第三話　家族

「おい、どこ行くんだよ？」
高志は勝手にどこかに行こうとしている石山――今まで気づかなかったが、どうやら死んだビルの屋上にいるらしかった。に向かって言った。
「俺は家に帰るけど？」
当然だろ。とでも言いたげな顔でそう言ってきた石山。
「……俺は？」
「知らん。自分の家に帰れよ。そうだな、まずお前の親がお前が死んで喜んでるかどうか見て来いよ。俺んち寺だからよ。居場所なくなったら来い」
やっぱこいつんち寺だったのか。と思いながらも高志は黙って頷いた。

町を歩いてみると、自分が他人からは見えないのだということを実感した。体はすり抜けるため、人とぶつかっても何ともない上に、鏡にも姿が映らない。この世界にいるようでいない。そんな存在なのだ。自分は。
しばらく商店街を歩き、住宅街に入るとすぐ高志の家があった。

「お前の親がお前が死んで喜んでるか見て来いよ」

家の前に立つと先ほど石山に言われた言葉が蘇った。何となく静まり返っている家の敷居をまたぎ、高志は家の中に入った――体がすけるため、壁も通りぬけられるのだ。
自分の音は聞こえないはずなのに、どことなく息を張り詰め忍び足になってしまう。家の中はそれほど静まり返っていた。誰もいないのか、そう思いながら居間に入ると仏壇の前で、1人佇んでいる母

親の姿があった。放心状態で自分の遺影をみている姿はとても見てられず、高志は思わず目を背けた。

「母さん……」

震える指でその肩に手を置こうとするが、すり抜けて触れることすら出来ない。母親の体温に触れることすら出来ない。その現実に高志はただ絶望するだけだった。

それから3時間ぐらいそこにいたのだろうか？　部屋の隅に座り、母親が放心状態で家事をする姿を見ながら、あぁ、あのゲームまだクリアしてなかったんだな。そういえば、あの本あいつに返してなかった。など、この家に置き忘れたものを一つ一つ思い返していた。

やがて夜になり、父親と妹が帰ってきた。2人とも母親と対して変わらない様子で、黙って母親が作った料理を食べていた。その姿はまるでロボットが動いているようだった。

「兄ちゃん、肉じゃが好きだったよね」

ふいに姉が口を開いた。その声は震えていた。

「そうだな」

父親はそういったっきり、また黙って夕食を食べていた。

「何で死んだりしたんだろ。あたしお兄ちゃんとゲームする約束してたのに。受験終わったらいくらでもやったる。って言ってたのに」

高志は黙って重い腰を上げた。重すぎてこれ以上この場にいられなかったのだ。

逃げるようにして家から立ち去った高志は家から少し離れた公園に来ていた。夜のためか、公園には誰もいなくて、敷地内は静まり返っていた。ブランコと滑り台があるだけの小さな公園。だが、高志

にとっては、小さい頃の思い出が詰まった場所だった。高志はブランコの隣に1人腰掛け、大きなため息をつきながら空を見上げた。

何であんなどん底みたいな顔してんだよ……。俺1人死んだだけだぞ、それなのに何であんな真っ暗なんだよ。

笑ってるとは思わなかった、が、悲しむだけで絶望に浸っているとも思わなかった。

「どうだった？」

ふいに横から声がした。見ると、目の前に石山が立っていた。俺は石山が近くに来たことすら分からないぐらい考え込んでいたのだろうか……。高志は一瞬何を言おうか迷ったが、

「家に帰るんじゃなかったんかよ？」

と、石山に聞かれた質問の答えとは全く違う言葉を口に出していた。

「今何時だと思ってるんだ？　松野が変な霊に取り憑かれないよう見に来てやったんだよ」

お決まりのため息混じりの声で石山は言った。高志が公園の古びた時計を見ると、今の時刻が2時過ぎだと言うことを告げていた。なるほど。確かに真夜中だ。

「余計な心配ありがとうございます」

自然と口から出て来る皮肉混じりの言葉。高志は自分でも強がっていることは分かっていた。強がってないと、自分が保てないような気がした。

「まあ、いいけど。予想はつくし」

さらっと一連の会話を終わらせた石山だったが、高志は「予想がつく」という言葉に思わずドキッとした。

「なあ、石山って――鎮魂師だっけ？　いつからそんなのやってんだ？」

間を作りたくなかった高志は、とっさに浮かんだ疑問を石山にぶつけた。大体、鎮魂師なんて名前ダサすぎだよな――とまではさすがに言わなかったが。

「ガキの頃から訓練みたいのはされてきた――霊が見えても、話せるのは難しいからな。こうやって仕事するようになったのはここ数年だけど」

石山は特に質問の意図を聞いてくるわけでもなく、ただ聞かれたことに対する答えを返した。

「いろんな霊がいるのんだよな？」

「そうだな。例えば――事故死・自殺・他殺・無理心中」

石山はそう言いながら、高志の隣に座り込んだ。相変わらず無表情で淡々としている。

俺だけじゃない。多分石山は本当に死にたくなくて死んだ奴の話も聞いてやって、未練なくこの世からおさらばさせなきゃなんねえんだ。

そういうのって、どんな気持ちなんだろ？

俺が生きてた頃だって石山は死んだ奴の相手をしていたはずだ。

「何で俺が死ななきゃならない」って言われたとき、こいつは何て言うのだろう？

「どうした？」

高志の顔を覗きこむようにして言った石山。寺育ちのためか、丸坊主までいかなくても髪はそうとう短かった。しかし顔は細面でその顔のわりには大きい瞳が、高志のほうを向いていた。

「石山さ。何で教室でもあんな無表情なんだ？」

死人を慰めて、鎮めて、そんな大変なことしてたら、せめて学校じゃ笑ってたいだろ。何でいつでも無表情で平気なんだよ。

「さあな」

石山は強がってるようには見えなかった。ただ苦笑いをしているだけだった。

そんな石山を見ていた高志の中に、何かモヤモヤとした感情が入り込んできた。石山だけじゃない、今もまだどん底の中で現実に耐えているであろう家族のことを考える度、高志の中の“それ”は次第に大きくなっていくのが分かった。
ただそれが何かは分からなかったが――

「さて。俺は帰るぞ。どーせ行くとこないんだから一緒に来い」

石山は立ち上がり、服についた砂を払っていた。
高志は渋々ながら頷き、2人は石山の家に向かった。

第四話　親友

石山の家はかなり広かった――ここら辺で唯一の寺なので、広いといえば当然なのだが。2階建ての母屋の他に本堂。そして敷地いっぱいに広がる墓。何年か前に来たのが最後だったが、確か人1人がやっと通れるぐらいの通路しかないほど、ぎっしり墓が詰まっていたのを覚えている。

「こっちだぞ」

生きていれば服を引っ張られていただろう。石山は母屋の前で怪訝そうな顔をしながら、高志のほうを見ていた。

「わりい」

高志が自分のほうへ来たのを確認した石山は、ポケットから鍵を出し、静かにドアを開けた。スライド式のドアは音もなく開き、2人は中に入った。

暗くてよく分からないが、家の中もかなり広いようだということは、容易に想像出来た。2階にある石山の部屋に案内され、石山はベットに座り、高志は床に腰を下ろした。ベットと机しかない、質素な部屋だった。

「じゃあ、俺は寝るから。霊は疲れないから寝なくてもいいけど、この部屋から出るなよ」

時刻は3時になるところだった。石山の言う通り、普段の高志ならとっくに睡魔に襲われているはずなのに、体はピンピンしていた。

「お前んち、みんな“見える”んだ？」

「まあな。部屋から出たら成仏させないから」

何故石山がそれ程までに部屋の外に出るのを拒むのか分からなかったが、高志はとりあえず頷いた。

高志は結局一睡も出来ず、ぼけっとしているうちに夜が開けた。壁にかけてある時計が7時を回ったころ、誰かが階段を登ってくる音

が聞こえた。

「玄！　いつまで寝てるの！」

高志が身構える間もなく、その人物は部屋の戸を盛大に開けた。

一瞬の沈黙。

恐らくというか絶対見えているのであろう。高志とその人物――見た目からして石山の母親か。は、がっちり目が合ったまま、お互い何も言わなかった。

「あー、それ俺の霊だから」

空気でそんな様子を察した石山は、布団に潜ったまま眠そうな声で言った。

「ふーん。そういえばこの子、あんたの同級生じゃなかったかしら？」

石山の母親は、高志をまじまじと見つめながら言った。

「ああ、そうだよ。しゃーないだろ、じーさんの命令なんだから」

石山は布団から出て、立ち上がっていた。ボサボサの髪の毛と、眠そうな目は不機嫌さを告げていた。

俺って“それ”呼ばわり？　ってか、今こいつしゃーないって言ったよな。

固まってる高志を無視して、石山は部屋を出ていった――ただ出ていく直前「そこにいろよ」とは言われたが。

１０分ぐらいしたころだろうか。ふいに部屋に入って来た石山は
「お客さんだよ」
といい、高志についてくるよう促した。
階段を降りると、家のものが居間にいるのだろう、食器が触れ合う音や話声が聞こえた――高志は何となく昨日の自分の家の光景と重ね合わせ、涙が出そうになった。

「客って？」
家を出た瞬間、高志は石山に聞いた。
石山はその問いにすぐには答えず、墓の方に歩き出した。
高志は怪訝に思いながら、少し墓の奥のほうへ進むと思わず「あっ…」と声をだした。

何度か行ったことがある自分の家の墓の手入れをしているのは、親友の山本将行だった。
「将行……」
高志は思わず呟いた。将行は桶を使って墓に水をかけていた。
しばらくその様子を見ていた高志。将行は水をかけ終わり、家から持って来たのであろう線香を立てると、その場に座り込んだ。
思えば今日は土曜日。将行は１１月という受験前なのにも関わらず、自分の墓参りに来てくれたらしい。石山はいつの間にかいなくなっており、辺りは静まり返っていた。高志はそのまま将行の隣に座ると、将行はポツリポツリと呟くように言葉を発した。
「なあ、高志。そっちで元気にやってるか？　俺、大変だったんだぞ。お前の葬式で作文読まされるし、宮本さんは泣きついてくるし。あの様子じゃ、お前に惚れてたんだろうな。良かったな、おまえら両思いだったんじゃん……」
宮本さん――高志が好きだった女子。ふっくらした頬と二重で大きな目に、肩の辺りまであるストレートの髪。いつも教室で笑ってる顔を見ているだけで和まされていた。将行の幼馴染なのにも関わら

ず、高志は将行のように自然に話したことはなかった。
そんな宮本さんが俺に惚れてた？　まさか。唖然としている高志の姿が見えない将行はまた言葉を続けた。
「なあ、みんな泣いてたぞ。涙流して泣いてたぞ。何で死んだりしたんだよ。約束したじゃんか、一緒に大学行くって。なあ、何でだよ、死ぬほどつらかったなら何で俺に相談してくれなかったんだよ。俺頼りないかもだけどさ、聞いてやることぐらいいくらでもしてやったのに……」
そう言った将行は泣いていた。膝を抱えて墓を見つめながら、大粒の涙を流していた。
「……ごめんな。俺が気づいやれば……俺が……声かけてやれば。高志苦労してたもんな……成績伸びてなかったもんな。俺さ、そのうち気晴らしに……カラオケにでも誘おうて思ってたんだ……何でもっと早く誘わなかったんだろ……何で気づいてやれなかったんだろ……ごめん。ホントごめん……」
途切れ途切れに発せられた言葉。将行は顔を上げてられなくなり、膝に顔をうずめていた。時々聞こえる嗚咽が号泣していることを伝えていた。

「ごめん……って、将行。何でお前が謝るんだよ。どう考えても俺が悪いよ」
そう言った高志も泣いていた。家族がどん底に陥ってるのをみても流れなかった涙。それが友人の言葉で、涙腺が壊れたかのように大量に流れ出した。

しばらく2人とも黙り込んでいた。2人の距離は1メートルとないのに、死んだ人間と生きてる人間との距離は遠く、決して触れ合うことも話し合うことも許されない。分かっていた。分かっていたが、謝りたい。将行に泣いて謝って、もう死んだりしないって言いたい。言いたいけど言えない――。

「俺は絶対忘れないよ。高志が好きだったこと、嫌いだったこと――松野高志っていう人間が存在してたこと。絶対忘れないから、安心して休めよ」

将行はもう泣いていなかった。真っ赤に腫らした目で高志の墓を見ながらそう言うと、将行はゆっくりその場を去って行った。

第五話　未練

「貴方の未練は何ですか――？」

将行が去ってから何分、何時間そこにいたのだろうか。涙も乾き、何を考えるわけでもなくただ呆然としていた高志の前に、1人の老人が現れた。わずかに残っている白髪とシワが目立つ老爺だった。

「……？」

高志は耳に入ってきた言葉を頭で理解するのに数秒かかった。既に乾いている涙を手でぬぐい、老人のほうを向いた高志。

何だろ、この人――死人？

足がないわけじゃない。そんなのは自分だって同じだ。ただ空気が違う、将行や石山とは違った空気。そう、自分と同じ空気を吸っているような感覚だった。

「俺の未練は――」

答えられなかった。老人はそんな高志をみて一歩前に踏み出すと言った。

「未練がないのなら、もっとこっちでゆっくりしませんか？　私らのように生きてる人たちを見ているというのも楽しいですよ」

高志は不思議な気分だった。もっとこっちにいたい。こっちにいて、将行や宮本さん、そしてクラスの連中が生きてるのを見ていたい。

高志は操られるように立ち上がり、老人の元へと足を踏み出そうとした瞬間。後ろで砂利を踏む音がした。

「何をやってるんだ？」

高志はその声で我に帰り、振り返ると石山がいた。一方老人の方は、驚いたような顔をして石山を見つめていた。
「勧誘か？」
石山は高志には目もくれず、老人のほうを向いて再び言った。その目はとても冷たく、どちらかというと、いつも教室で見る石山と同じ目をしていた。

「話し相手もいないのでねー、寂しくなってしまったんですよ」
老人はそんな石山に臆することなく、独り言のように空を見上げながら言った。
「あんたは人に害はないから安心して残したもの探して下さい。もし成仏したいのなら、祖父にでも頼んでみて下さい」
石山はそう冷たく言い放つと、高志に向かって目で合図して来た。おそらく「行くぞ」と言う意味だろう。高志は石山に従い、その場をあとにした。

石山は墓を抜けるまで一言も口にしなかった。墓を抜け、本堂へと続く石階段の途中に座り込むとやっと口を開いた。
「危なかったな、お前」
「え？」
高志は意味が分からなかった。
「あのじーさんはな。仲間が欲しかったんだ。松野ついて行こうとしてただろ？　あれでついてったら本物の悪霊になって、俺の力じゃ成仏させられなくなってた」
だから石山は俺1人で外に出るのを拒んでいたのか。高志はそれで昨日から不可解に思っていた謎が解けた。
「でもあの人悪そうに見えなかったぞ。あんなひでえ言い方しなくても良かったんじゃねえの？」

高志は先ほどから気になっていたことを口にした。
石山は軽くため息をつくと、立ちっ放しの高志を見上げ高志と目を合わせながら言った。

「俺は神じゃない。霊なら全部救ってやれるわけじゃない。救えないものには下手な優しさより突き放したほうがお互いのためだ」

石山は先ほど老人にも見せた軽蔑のような冷たい視線を高志に向けていた。下から見上げられているのにも関わらず、高志は思わず一歩下がってしまった。
「松野言ったよな。何で学校でもあんな無表情なんだ？　って。俺はな、好きで無表情なわけじゃないんだよ。死者といるとな、笑ったり、泣いたり、怒ったりすんのが馬鹿らしくなってくんだよ。それでも俺は死にたくはない。俺みたいな半人前でもやるべきことが沢山あるからな。それが終わるまでは死ねないんだ」
石山は高志から目を反らし、地面を見つめながら言った。石山らしい、まっすぐ意図を伝えてくる言葉だった。初めて聞かされた石山の本音だった。というより、初めてこいつとこんなに長い間会話をした。いつも他人とは干渉せず、気味が悪いやつだと思っていた。自分が出来る限りの霊を慰めて、毎日生きてるやつだとは微塵にも思っていなかった。

「みんな強すぎだよな……」

高志は下を向いていた。石山のように言葉を選ぶためにではない。気まずさから来る罪悪感が高志に下を向かせていた。
石山だって将行だって、多分宮本さんだって――いや、生きてるやつで辛いことがないやつなんかいない。そう、そうなんだ。頭では分かってた。分かってたけど、俺には耐えられなかった。紙の上の数字に一喜一憂して、やりたいことも全部我慢して全てそれにつぎ

込んで、そんなことまでして手に入れるものってあるのか？　あったとしても、得るものより失ったもののほうが大きいような気がしていた。生きてる意味などない。と本気で思っていた。
本当か？　ふいに自分のなかに疑問が生まれた。本当にお前は生きてる意味がなかったのか？家族がいた。親友がいた。クラスメイトがいた。毎日笑ってた。それでも生きてる意味がなかったのか？
それは――。自答できなかった。いや、自答したくなかった。
高志が下を向いて必死に考え込んだのを見た石山は、石階段の上に寝転がり次の段の上に頭を預け空を見ながら口を開いた。

「お前の選択が完全に間違っているとは思わない。人それぞれなんだろ。努力しても報われない世界なら捨てほうがマシかもしれない。でも楽しいことだってあっただろ？　いい友達だっていただろ？死ぬってのはそれを全部捨てることなんだ。何もかもなくなるの意味分かってなかっただろ？」

高志は下を向いたままだった。先ほど浮かんだ自答を口に出すことをためらっていた。口に出したら認めてしまうような気がした。それでも。逃げちゃだめだよな。俺ずっと逃げてきたもんな。
高志はゆっくり口を開いた。

「俺の未練てさ――生きてた意味かな。よく言えないけど、俺、自分が死んでも誰も悲しまないって本気で思ってた。でも違ったよな。みんな泣いてた、俺が死んで泣いてた、それって俺が生きてた意味だよな？　俺、無意識のうちにそれ知りたかったんかもしれない。ホント馬鹿だよな。俺の選択は間違ってたんだよ。家族どん底に突き落として、親友泣かせて、惚れてた女まで泣かせてよ。どうしょうもねえよ」

また涙腺が緩んできた。高志の視界は涙で曇ってきたが、高志は特

に涙を拭うこともせず、ただ立ったまま泣いていた。地面に涙が落ちているのに、地面は全く持って濡れていない――この現実が自分はここの人間ではないということをより実感させていた。
石山に突き放されるかな。とチラッと思ったが、石山は何も言わずただぼんやりと空を見つめていた。
ただその言葉ではない優しさが高志にとって何よりも温かかった。

最終話　あるべき場所へ

高志が気付くと夜が明けていた。昨日、石階段で石山と話をしてからの記憶が殆どなかった。しかし母屋に帰り、確かに石山の部屋にいる自分がいる。多分上の空でここまで来たんだろう。そしていつの間にか眠ってしまったらしい。

酔っ払いみてえだな……。

自分自身に苦笑しながら起きたがった高志。部屋には誰もいなかった。高志はふと時計をみると、時刻は7時半だった。おそらく昨日同様、石山家では7時過ぎから朝食なのだろう、耳をすますと1階から人の声がしていた。

俺、今日戻るんだよな。

高志はふと思った。石山との約束は3日間だった。時間までは指定していなかったが、遅かれ早かれ24時間後俺がここにいることはない。

高志はそう思うと、急に複雑な気分になった。学校は面倒で行きたくないが、クラスメートたちには会いたい――そんな感じだった。行きたくないけど、行きたい。帰りたくないけど帰りたい。

そんなことを思っているうちに高志の中に1つの疑問が生まれた。

俺はどこに帰るんだ？

死んだ俺に帰る場所などない、戻る場所などない。俺はどこに行くんだろ、どうなるんだろ。

高志がそんな不安に駆られていると、ガチャッというドアが開く音がし、石山が入って来た。
「少しは整理着いたか？」
部屋に入って来るなり石山は言った。
「俺さ。どこ行くんだろ？」
高志はその質問には答えず、先ほど感じた不安を石山に訪ねた。
「成仏する前の霊って、みんな同じこと聞くんだな」
そう言った石山は僅かに口元に笑みを浮かべていた。ただそれは笑顔ではなく、皮肉の笑みだったが。
「悪かったな、ワンパターンでよ」
「安心しろよ。天国とは保証出来ないが、地獄ではない。少なくともここよりは良い所だろうな――って俺はいつも言ってる」
最後の一言が余計だろ。と思いつつ、高志は「そうか……」と頷いた。
「どうしたい？　行きたい場所とか会いたい奴とかあるか？」
石山は高志がそれ以上成仏したあとの世界について考える間も与えず、高志に問いかけてきた。
「そんなこと言われてもな……」
将行にだってもう1回会いたい。宮本さんにだって会いたい。行きたい場所だってある。
でも――
高志は思った。これ以上ちんたらしててもどうしょうもないよな。誰かに会えば、思い出の場所に行けば、一昨日からくすぶりかけていた思いが強くなってしまいそうだから。
死にたくない。という思いが――
「いいや。もうそろそろ逝くよ」

高志の気持ちは固まっていた。どんなとこだろうと構わない。俺は俺のあるべき所に帰る。ただそれだけだ。
石山は一瞬「本当にいいのか？」という顔をしていたが、高志の顔が真剣なのを見てその言葉は口に出さず「分かった。少し待ってろ」とだけ言い、部屋を出て行った。おそらくいろいろ支度があるのだろう。
１０分ぐらいした頃だろうか。石山は右手に黒い袋を持って部屋に戻ってきた。
「さて。行きますかね。成仏は死んだ場所じゃなきゃ出来ないから」
高志は黙って頷き立ち上がった。

それから2人は一言も話さなかった。気づくと高志は飛び降りたビルの屋上に来ていた。
「なあ。ちょっとだけ――１０分だけいい？」
「いいぞ。好きなだけ時間使え」
高志はそのまま屋上から町を眺めていた。いつもと変わらない町並み、確か本当に死ぬ直前もこうして町眺めてたな。ただその時何を考えていたか高志には思い出せなかった。何も考えてなかったような気がする――馬鹿すぎるな俺。

「将行、ごめんな。俺、お前のこと全然考えてなかった。いつだってお前は俺のためだったような気がする、俺、自分だけ辛いとか考えてさ、本当ごめん――母さん、父さん、江美。早く立ち直ってくれよ、悪いのは全部俺だからさ。みんなは悪くないからさ。お願いだから自分責めないでくれよ――宮本さん。俺本気で好きだった。宮本さんも好きだったって聞いて本気で嬉しかった。でも、もっとマシな奴見つけてくれよ……」
呟くように風に向かってそう言った高志。もう泣いていなかった。
それらの言葉は絶対に届かないことは分かってはいたが、風に乗っ

て届くような気がした。
「俺、成仏できねえかも。こんな後悔ばっかしてて、未練だらけだぞ？」
何となく笑いながら後ろを振り返り、そう言った高志。座り込んでいた石山は何かを考えていたのか、ゆっくり顔をあげると言った。
「松野の“それ”は未練じゃない。生きる意味、生きてた証なんだ。宝物だと思って大事に持ってけよ」
何か結局コイツには道案内してもらってばっかだな。と思いながら高志は頷いた。
「んじゃ、そろそろ」
まるで家に帰るときの別れの挨拶のように、高志は言った。石山は後ろを向き持ってきたバックからなにやらいろいろ取り出していた。
「石山」
高志が思い切って呼びかけると「ん？」と顔も向けずに石山は返事をした。

「いろいろありがとな——たまには笑えよ」

もっといい言葉があるはずだった。もっと言わなければならないことがあるはずだった。それなのに、結局それしか言えなかった。
が、石山は作業の手を止めると振り返り言った。
「松野こそ。もう死ぬんじゃないぞ」
笑っていた。最初で最後の石山の笑顔だった。それは想像していたよりもずっと優しく、自然な笑顔だった。
「じゃあいくぞ」
石山はそう言うと、なにやらお経のようなものを呟き始めた。同時に高志は宙に浮いているような気分になった。とても温かかった。体中の力が抜けていくような温かさが高志の体中を駆け巡った。同時に意識も薄れていった。高志はほとんどない意識の中で

「ありがとう」

そう呟くと静かに目を閉じた。

最終話　あるべき場所へ（後書き）

ここまで読んでくださった方。誠にありがとうございます。
書きたいことが多すぎて、結局まとまらなくなってしまったことは反省しております……。語彙力・文章力のなさを実感しました。
感想。批評。など、お待ちしております。ありがとうございました。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5005b/

未練

2010年10月14日14時30分発行